

日蓮大聖人御書全集

しょうにんとうごへんじ

聖人等御返事

新版
1938
S
1939

しようとんどうご へんじ

聖人等御返事

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

につけうとう

弘安 2 年 (79)

10 月 17 日

58 歳

日興等

こんげつじゅうごにちとりのときおんふみ おな

じゅうしちにちとりのときとうらい かれ

今月十五日酉時御文、同じき十七日酉時到来す。「彼ら
御勘氣を蒙るの時、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と唱
たてまつ うんぬん

え 奉 る」 云々。

ただごと

さだ

へいのきんご

み

じゅうらせつ
い

ひとえに只事にあらず。定めて平金吾の身に十羅刹入り
か ほけきよう ぎょうじや こころ

易わつて、法華経の行者を試みたもうか。例せば、雪山

せつせん

童子・戸毘王等のぞとし。はたまた、悪鬼その身に入る者か。

どうじ しびおうとう

釈迦・多宝・十方の諸仏・梵帝等、五の五百歳の法華経の

しゃか

たほう

じつぱう

しょぶつ

ぼんたいとう

ご

ごひやくさい

ほけきよう

ぎょうじや しゅご

おんちか

だいろん

い

よ

行者を守護すべきの御誓いはこれなり。大論に云わく「能く毒を変じて薬となす」。天台云わく「毒を変じて薬となす」云々。妙の字虚しからざれば、定めて須臾に賞罰有らんか。

伯耆房等、深くこの旨を存して問注を遂ぐべし。平金吾に申すべき様は、「去ぬる文永の御勘氣の時の聖人の仰せ、忘れ給うか。その殃いまだ畢わらず。重ねて十羅刹の罰を招き取るか」。最後に申し付けよ。恐々謹言。

十月十七日戌時

日蓮 花押

じゅうがつじゅうしちにちいぬのとき

しょうにんとうごへんじ

聖人等御返事

かた

科

皆

ひともう

だいしんぼう

らくば

顕

殊

怖

てん

おんはか

おのおの

怖

ひとびと

なり。

こんど

つか

淡

路

ぼう

今度の使いにはあわじ房をすべし。

このことのぶるならばこの方にはとがなしとみな人申すべし。また大進房が落馬あらわるべし。あらわれば、人々ことにおずべし。天の御計らいなり。各 もおずることなかれ。つよりもてゆかば、定めて子細いできぬとおぼうるなり。